

大阪女学院大学 国際共生研究所シンポジウム
2011年10月31日(月) 午後6時半～8時半
大阪女学院大学 第1会議室
全体テーマ「公正で平和な世界へ：国際共生の意義と役割」
大阪女学院大学 奥本 京子
過程としての国際共生 ～紛争転換の視点から～

【1】さいしょに：国際共生研究所の小さな試みから

*ひたすら、痛みのあるところからの「声」に、耳を傾けることの意味

1) 2011年6月17日、研究所主催、難民支援NGO、RAFIQ、H氏とW氏
「国際共生」の意味とは、痛みのあるところに一緒に居ること——耳触りのよい「連帯」や「共生」といった概念が幻想に過ぎないかもしれないという現実を認識しながらも——それ自体を指すのではないか。RAFIQの例になれば、社会の痛みに対する取り組みの「方向性」、そして「過程」それ自体を指すのではないだろうか。

2) 2011年10月21日、研究所主催、RAWAと連帯する会、マラライ・ジョヤ氏
My goal abroad has always been the same as when I am inside Afghanistan: to unite people and to build power to destroy the domination of the warlords and the Taliban, and to end the occupation of our country. My wish is that this international solidarity will build strength and unity, and that when people become aware, they will rise like a storm that brings the truth. One voice—or even many isolated voices—is powerless. But when we weave our voices and our efforts together, we can become unbreakable.

This movement we are weaving must come from struggles in every corner of the world: our voice of resistance in Afghanistan, the cries of agony of the children of Palestine, the tears for democracy denied in Burma, the young freedom-loving students of Iran, the struggle of men and women in Turkey from whom I hear inspiring stories of bravery and courage in the face of horrible torture and killings in the Turkish prisons, the endeavours of Venezuela, Chile, Cuba, Bolivia and progressive movements in other American nations, the fight of African people for just and free societies. Our sufferings—and enemies—are the same. And our joy and happiness is the same.

Malalai Joya, *Raising My Voice*, Rider, 2009, pp. 209-210

***講演会／ワークショップのスタイルについて**

- 1) 講演者（特に紛争の当事者）にとって、自身の語りに十分耳を傾けられる状況を確保することは、平和・人権・生命といったテーマの性質上、特に必要
- 2) 講演者にとっては、語りを聞かれた後に、如何なる反応が返ってくるかを知りたいであろう（無視される存在として長年生きる当事者であればなおのこと）
- 3) 聴衆にとっては、湧き上がる疑問や感想の共有という自然な欲求を、安全な場において満たすことができることは、学びの観点から重要
- 4) 「場」が、打ち上げ花火のための場ではなく、「つながる市民」としての意識を再認識し、次の行動を顕在化させる場としたい
- 5) 一連の過程を経て、双方向に関係性が築かれた場合、それは平和の創造の具体的な一例となる

==> 「国際共生」とは、社会の痛みに対する取り組みの「方向性（空間軸）」、そして「過程（時間軸）」を指すもの

==>ここで浮上する課題

- 1) 当事者の声といったとき、「(紛争) 当事者」とは誰か、そして「われわれ」は誰か。
- 2) 「方向性」や「過程」とは、如何に意識化・明示化・顕在化することができるものか。

【2】暴力と平和の概念

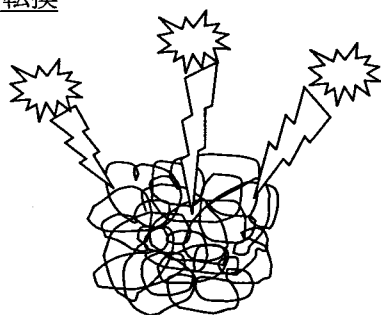
直接的・構造的・文化的暴力／平和及び消極的・積極的平和

暴力	直接的暴力(DV)	構造的暴力(SV)	文化的暴力(CV)
平和	直接的平和(DP)	構造的平和(SP)	文化的平和(CP)
消極的平和 (NP)	DV の不在 (休戦・砂漠・墓場)	SV の不在 (搾取の不在・ 構造の不在)	CV の不在 (正当化の不在・ 文化の不在)
積極的平和 (PP)	DP の存在 (協力)	SP の存在 (衡平・平等)	CP の存在 (平和の文化・対話)
平和	NP+PP	NP+PP	NP+PP

一般に「平和」に対置されるのは「戦争」である。この発想では、問題が国際政治の枠組みに限定され、矮小化される恐れがある。「暴力」に対して「平和」を対置することによって、より大きい枠組みの中で、思考することが可能になる。また、このことは、紛争の

あり方をより深く捉える視野を提供する。暴力・平和概念の捉え方におけるダイナミズムが、人間社会の多様な関係性を扱うことを可能にし、暴力を否定し平和を肯定するにあたり、紛争をどう扱うかという論点が肝要であることを浮かび上がらせる。

紛争の概念と紛争転換



紛争の可視化／顕在化できる部分

紛争の潜在的な部分

平和学・平和ワークにおける紛争（コンフリクト）とは、複数の当事者から成る集団において、個人内（複数の考え方）・個人間・グループ間・国家間・地域間等の多様なレベルにおいて発生する。当事者は、それぞれに目標を保持しており、これらの目標間に矛盾があるとき、そこには紛争が存在する。そして、こうした紛争から暴力が生起しうる。

紛争という現象を、二層を意識して分析・対処する。第一に、既に表面化している直接的な対立の部分、すなわち可視化できる矛盾の部分認識する。そして、第二に、それが生起するより大きなコンテキストの部分、すなわち未だ可視化できない潜在的な要因を探知する。この二層の分析は、紛争が暴力化している場合は、その表面的な暴力の側面だけに注目するのではなく、暴力の様々なあり方を認識し、可視的な武力紛争が終わったからといって、問題が解決したとは考えない。それどころか、場合によっては、却って武力紛争の表面的終結によって問題の本質が隠蔽される危険性があると考ええる。

紛争転換は、矛盾を顕在化する作業となる。平和ワーカーと呼ばれる調停役は当事者間を媒介し、一見、矛盾するよう見える諸目標であっても、時間をかけて当事者の目標や必要を探り当てる手助けをする。その介入の過程を通して、平和ワーカーは、当事者が保持する複数の目標における相互の共通項を発掘・調整し、当事者全員にとっての新たな目標を設定することであり、その目標に向かって平和的な紛争転換を実現することである。

「転換」概念は重要である。平和ワークにおいては、「暴力」概念に対置する「平和」のダイナミズムを認識し、暴力を否定し平和を構想するためには、その間に存在する「紛争」を如何に捉え、それを如何に平和的に転換するかが重要となる。暴力概念の拡張によって、平和や暴力といった対概念の関係性をより深く説明することが可能となり、また、平和や暴力という概念の基礎には、常に「紛争」概念が存在すると認知されることになる。そして、紛争概念により、平和を創造するワーク自体が、スタティック（静的）なあり方から、よりダイナミック（動的）なあり方へと転換していく可能性が生じる。

==>平和を求める作業において、「結果」や「状態」ではなく、「方向性」や「過程」それ自体を、「国際共生」と呼び、その「方向性」や「過程」を模索するにあたり、平和的手段による紛争転換の概念は示唆を与えるであろう。「国際共生」とは、ダイナミックで有機的な関係性の創造の「方向性」や「過程」であるとしておきたい。

【3】「当事者」、「平和ワーカー」、「われわれ」の関係

平和ワーカー／紛争ワーカー (peace/conflict worker) ==>平和ワークを行う者

平和ワーク==>国際政治ではほとんど語られることのない、市民社会・NGOを基盤とした非暴力介入活動で、紛争当事者や介入者（外部の当事者）が行う平和を求める作業

紛争転換・非暴力介入といった平和ワークの分野において：

平和ワーカー=>「介入者」

平和ワークの第一の主体=>紛争当事者

紛争の現場に介入し調停の仕事をする者=>「外部の当事者 (outside party)」
=> 徐々に「当事者」と成る。

平和ワーク==>介入者（外部の当事者）と、紛争転換の過程における平和ワークの第一の主体である紛争当事者とが、共に担うべきもの

平和ワーカーの仕事とは何か：

紛争転換の現場においては、問題の矛盾を顕在化する作業が重要である。平和ワーカー／紛争ワーカーと呼ばれる調停役は当事者間を媒介し、一見、両立しないように見える諸目標であっても、時間をかけて当事者の目標や必要を探り当てる手助けをする。その介入の過程を通して、平和ワーカーは、徐々に紛争の根本部分に深く関わる。その仕事は、当事者間の複数の目標における共通項を発掘・調整し、当事者全員にとっての新たな目標を設定し、平和的な紛争転換を実現することである。

==>国際共生（方向性や過程を指す）という平和ワークの担い手は、「平和ワーカー」であり、それは「われわれ」である。そして、紛争当事者も徐々にわれわれと共に平和ワークを担うようになる。そうして、国際共生は、「声」を発しようとする当事者と、聴こうとする介入者が一緒になって模索しようとするその過程を指すようになるのである。

【4】小田実の「共生」論から

1) 「われ・われ」を考える

小田実『9. 11と9条 小田実 平和論集』(東京: 大月書店, 2006) 513-514.

小田実は、「市民とは何か」の項において、「仕事に職業と技能の意味を込めて職能と言うなら、現代社会では、会社員も教師も役人も工場労働者も農民も新聞記者も商店主も医者も専業主婦も、それぞれ職能をつうじて働き、生計をたてるとともに社会を形成、維持している」とした上で、そのような現代社会に問題があるとしたら、本来は各人が職能を通じて解決できるはずのところ、そうはなっていないことであろう、と指摘している。そしてその理由は、問題そのものが、各個人の職能の枠組みを越えて、「重なり合い、結びついて、社会に大きく広がって」いるからだという。であるから、結局は、「みんな集まっていっしょに問題を論じあい、知識、知恵を出し合い自分たちで解決をはかる」より他になく、それこそが、市民運動であると解説する。

『りいど みい』第二号、「小田実を読む」発行、北野辰一他編、2011年3月。

小田による「われ=われ」の思想について：

それぞれの努力が集まって、「われ=われ=われ……」の動きを形づくる。「市民運動」って、実はそれなのよ。「市民運動」というものがどこかにあって、そこに市民が入るのではない。市民それぞれがまずひとりの「われ」として動き、その一人ひとりの「われ」と「われ」がつながり合うことで、市民運動の形成、組織される。

「われ=われ=われ……」のつながりは、「われ=われ=われ=われ=われ……」という具合にどこまでも広がって、そのまま国境を越え、民族の別を越える。まさに共生だね。

当然のこととして、違う価値観が会う中で、衝突は起こるよ。双方の矛盾や衝突を処理し、「われ」と「われ」がうまく共存・共生していけるようにするのが政治であり、そのための政治的技術が民主主義なんだ。(122)

ここで、「市民」の意味することは、「国籍」を保持しているかどうかということ、また、いわゆる「市民権」の有無といった範疇の話としてではないだろう。「国家」の枠組を超えて、社会・世界における共生の問題を考えると、人(ひと)と人(ひと)の間にある平和的關係性を創り出していくための方途を模索するためには、平和ワークという仕事の主体の役割は大きい。

小田実『「殺すな」と「共生」：大震災とともに考える』岩波ジュニア新書、岩波書店、1995。
小田は、市民社会運動家であり小説家としての視点から、平和・共生概念を語っている。「共生」とは、co-existence (国際政治にでもふさわしいことばで上げすぎる) や symbiosis

(生物学的でアミーバ的)と翻訳するよりも、co-habitation of different values としたほうがふさわしいという。玉砕や特攻という究極の暴力的な生き方とは根本的に対立する生き方を指す、共生という概念を根本的原理として、社会をつくり上げていくべきである。

「共生」==>平和ワーカーとしての市民(われわれ)が、共に生きることを考える。

2) 「過程」としての共生を考える

小田実『「共生」への原理』小田実全集 評論 10 発行：講談社、発売：復刊ドットコム、2011。(IV.「存在のことば」、「運動のことば」)

p.183 「今日は、赤ちゃん、私がママよ」=>「存在のことば」的、権力的発想の歌

p.189 名詞=>機会的にあまたの名詞を引きずり出して、名詞によって言いあらわされる存在を固定してしまう

p.192 運動がスイ退におもむくと「運動のことば」もたちまち「存在のことば」、そして、「体制のことば」になる。

p.194 「言語活動領域」のどんづまりに来ている、そこでぶざまに苦しんでいるうちに、ようやくはっきりしてきた=>「運動のことば」で考えてみるということ、名詞を中心にして考えるのではなく、動詞から考えてみる。そこではじめてどんづまりが破れる。すくなくとも、そのキッカケがつかめる。

p.195 時間的ばかりではなく空間的にも開く。自由になって、「言語活動領域」にいろいろな回路が生まれて来て、それらが少しは自由に動きぶつかりあって、振り幅がひろがる。動詞を基本にして思考そのものを開いて行く。動詞で考えると、次に、「私はどうするのか」ということが入って来ます。

==>動詞を活用し、「運動のことば」を話すわれわれのあり方は、紛争転換の一つのキーワードである「transend (超越)」地点を目指す過程における活動と連動する。

==>国家間関係だけではなく、国際社会のその他の主体をも取り入れた関係を対象とする「国際共生」を考えるにあたり、その概念は、公正で平和な世界を達成するために、有効な概念である。「ひたすら声に耳を傾ける」ということは、公正で平和な世界の構築というゴールを目指す、その方向性そのもの、あるいは過程そのもの、であると考えられる。

ⁱ Johan Galtung, "Introduction: Peace by Peaceful Conflict Transformation—the Transcend Approach," *Handbook of Peace and Conflict Studies*. Eds. Charles P. Wbel and Johan Galtung (Abington: Routledge, 2007) 14-32.に掲載の Table 2.3. Peace: negative and positive, direct, structural, cultural (31)を、報告者が編集したものである。